

回復期病棟における家族教室の有効性の検討

大久保登紀子
新座病院リハビリテーション科

キーワード：家族教室・介助指導・自宅復帰

[目的]回復期病棟を有する当院、先行研究で回復期病棟患者の自宅復帰率向上の要因として、家族に対する介助指導の早期介入が示唆された。現状、家族側の問題点として入院中の患者の機能・能力面を把握できず具体的な退院後の生活イメージがつかない、また退院後、介助に慣れるまでに時間を要す事が挙げられた。当院の問題点として家族への介助指導時間を十分に取れていないと言う事が挙げられた。そこで今回、新たな試みとして入院中の患者の家族を対象に、患者の現状について認識を深めてもらい、かつ自宅退院後の生活を具体的に考える機会を提供する事を目的とし、集団での介助指導として家族教室(以下、教室)を実施した。詳細は、当院回復期病棟に入院する患者家族 6 名を対象に、移乗動作(脳卒中、中等度片麻痺の設定)の介助方法をテーマとして企画した。終了後アンケート調査を行い、家族教室の実施にあたり今後の課題を検討したので報告する。[方法]教室終了後、①内容は役立ったか(1.「全く役立たなかった」~5.「とても役立った」の五段階評価)②今後の企画内容に対して(障害や介助方法について複数回答)③今後の教室形態(講義や実技、他患家族との交流複数回答)の 3 項目の質問と自由記載欄を設けたアンケート調査を行った。[結果]①の質問に対し、5 名が「とても役立った」1 名が「まあまあ役だった」であった。選んだ理由として、「頭では多少分かっていたつもりだったが、1対1の実技で細かい部分も良く分かった」があった。②の質問に対し、4 名が「介助方法」3 名が「転倒予防」1 名が「高次脳機能障害」「嚥下関係」を希望した。③の質問に対し、3 名が「講義・実技どちらも」2 名が「実技形式」1 名が「他患家族との交流」「質問コーナー」を希望した。自由記載欄には、「1対1の指導で分かり易く落ち着いて出来、患者にあった適切な話をして頂けた」「今後、実技形式を色々な形態で希望する」などの意見があった。[考察]実施した内容に対し対象者から役立ったとの結果が得られ、今後の企画や形態としては、患者が有する障害に対しての講義や介助方法の指導が挙げられた。この事から、介助方法の基本の伝達、患者の状態に合わせた介助方法を 1対1の指導で時間を掛け反復し行ったことで、患者の現状を把握し退院後の生活を具体的に考える機会を提供できたのではないかと考えた。また同じ境遇である対象者同士が情報交換をしたり、同じ目的を持ち教室に参加した事で、介助に対するモチベーションが上がったと考える。教室で学んだ内容が退院後の生活に応用出来たか、今後追跡調査を実施していく。[まとめ]今回の報告で、時間を掛けた 1対1の介助指導・対象者同士の情報交換の場として、退院後のイメージ・介助に対するモチベーション向上のきっかけ作りとして家族教室は有効であると思われる。